

A 語句の意味と読み

(1) (男の) きょうだい。ここでは兄。※「兄弟」と訳す教科書もあるので、お使いの教科書に合わせる。／現代仮名遣いでは「しょうと」。公世の側から見た男のきょうだいが良覚僧正にあたる

(2) りょうがくそうじょう /★「りやう」→「りよう」、「じやう」→「じょう」。歴史的仮名遣いの「-au・-iau」は伸ばす音になる

(3) この上なく。たいそう。非常に。／下の「腹あしき」を強めている副詞。程度がこの上ないことをいう

(4) 意味＝怒りっぽい・気が短い・気性が悪い／終止形＝「腹あし」。ここは体言「人」にかかる連体形。／「あし（悪し）」がついた語。この一語がこの話の笑いの前提になっている

(5) 木を切ったあとに地面に残った切り株。／「くひ（杙）」は地面に打ちこんだ棒のこと。切ったあとの株がそれに見えるので「切りくひ」

(6) ますます。いっそう。／現代語の「いよいよ（とうとう・ついに）」ではない。程度が高まっていく意味

B 文法

(7) 過去の助動詞「き」の連体形。下の「は」（係助詞）の前で「～と申し上げた人」という体言に準じる使い方（準体法）になっているから。／「き」は連体形が「し」、已然形が「しか」。ここは「～しは」の形なので連体形

(8) 「なり」＝断定の助動詞「なり」の連用形（体言「人」に接続）。「けり」＝過去の助動詞「けり」の終止形。あわせて「～であった」の意。※人づてに聞いた過去を表す（伝聞過去）と説明する教科書もあるので、お使いの教科書の説明に合わせる。／「人＋なり」＝体言に接続しているので断定。伝聞推定の「なり」ではない

(9) 「しかる」＝副詞「しか（＝そう）」にラ変動詞「あり」がついた「しかり」の連体形で「そうである・そのようだ」。「べから」＝助動詞「べし」の未然形。これに打消の「ず」がついて「そうあるべきではない＝ふさわしくない」となる。※「べし」を適当（～のがよい）と説明する教科書と、当然（～べきだ）と説明する教科書があるので、お使いの教科書に合わせる。／「しかるべし」でひとまとまり（＝ふさわしい・適当だ）。その打消が「しかるべからず」

(10) 尊敬。木を切ったのは良覚僧正自身であり、他から動作を受けているわけではないから。「(僧正が) お切りになった」と訳す。作者から僧正への敬意を表す。／★受身なら「(僧正が)

誰かに切られた」となり、話の筋に合わない。動作主が誰かをまず決めるのが決め手

(11) 完了の助動詞「ぬ」の連用形。下の「けり」に続くので連用形。「に＋けり」で完了＋過去、「～てしまった」の意。ここは完了で確定してよい。／断定の「なり」の連用形「に」とまぎれやすい。下に「けり・き・たり」が来る「に」は完了の「ぬ」。「ぬ」が強意（確述）になるのは「ぬべし」「なむ（＝ぬ＋む）」のように下に推量の語が来ることで、ここは当てはまらない

(12) 強意の係助詞。結び＝「ける」（過去の助動詞「けり」）、活用形＝連体形。いわゆる係り結び。／★ぞ・なむ・や・か→連体形、こそ→已然形。終止形「けり」と答えるとバツ

C 主語・指す内容・敬意の方向

(13) 「言ふ」の謙譲語。作者（兼好法師）から良覚僧正への敬意。／★地の文の敬語は作者からの敬意。向く先は敬語の種類で決まり、謙譲語なら動作を受ける人（ここでは良覚僧正）、尊敬語なら動作をする人へ向く。「聞こゆ」は「言ふ」の謙譲語なので受け手の僧正へ

(14) 良覚僧正の住まい（僧坊）。／「坊」は僧が住む建物。そのそばに榎の木があったことがあだ名のもとになる

(15) 人（＝世間の人々）。／「人、『榎の木』の僧正」と言ひける」の「人」がそのまま主語になっている

(16) 良覚僧正の言葉。「この名、しかるべからず」＝「この名は、ふさわしくない」と僧正が言ったもの。／「とて」は「と言って」。その直前のかぎかっこの中が僧正の言葉にあたる

(17) 良覚僧正。「(僧正が) その木をお切りになってしまった」となる。／「とて」＝「と言って」なので、言った本人がそのまま次の動作の主語になる

D 口語訳

(18) 公世の二位の兄弟（兄）で、良覚僧正と申し上げた方は、たいそう怒りっぽい人であった。／「せうと」は男のきょうだい（ここでは兄）。「聞こゆ」は謙譲語なので「申し上げた」と訳す。「なりけり」は「～であった」

(19) 「この名は、ふさわしくない」と言って、その木をお切りになってしまった。／「られ」は尊敬なので「お～になる」と訳す。「にけり」は「～てしまった」

(20) (僧正は) ますます腹を立てて、切り株を掘り捨ててしまったところ。／「たり」は完了、「けれ」は過去の助動詞「けり」の已然形。已然形＋「ば」で「～たので・～たところ」

(21) その跡が大きな堀であった（＝大きな堀になっていた）ので、(人々は)「堀池の僧正」と言った。／「堀にてあり」＝「堀である」。「ぞ～ける」の係り結びは訳では強めて読むだけでよい

E 内容・記述

(22) 良覚僧正の住まいである僧坊のそばに、大きな榎の木があったから。／あだ名はいつも「僧坊のまわりにある目印」からつけられている

(23) 一つ目＝榎の木を切ったこと（本文は「切られにけり」。「られ」は尊敬なので、訳に出すなら「お切りになった」）。二つ目＝それでも残った切り株を掘り捨てたこと。／あだ名のもとになっている物を、そのつど消そうとしている

(24) 切り株を掘った跡が大きな堀になり、そのために「堀池の僧正」という新しいあだ名がついてしまった。／★消そうとした行動そのものが、次のあだ名のもとを作っている

(25) あだ名を消そうとむきになるほど、かえって新しいあだ名が生まれてしまう点。（三十六字）／木→切り株→堀と、消した跡がそのまま次の名のもとになる。短気な人のこっけいさを描いている

F 文学史（本文全体をふまえて答える）

(26) 作者＝兼好法師（卜部兼好。「吉田兼好」とも呼ばれる）／鎌倉時代の末ごろ（十四世紀前半）に成立したとされる。／序段と第一段～第二百四十三段からなる随筆。この話は第四十五段にあたる

(27) 日本の三大随筆と呼ばれる。もう一つは『方丈記』で、作者は鴨長明。／『枕草子』＝清少納言、『方丈記』＝鴨長明、『徒然草』＝兼好法師。この三点セットは頻出

(28) つれづれなるままに（このあと「日暮らし、硯にむかひて…」と続く）。／「つれづれ」＝することがなく手持ちぶさたなこと。書名もここから来ている

【現代語訳（全文）】

公世の二位の兄弟（兄）で、良覚僧正と申し上げた方は、たいそう怒りっぽい人であった。（その僧正の）住まいの僧坊のそばに、大きな榎の木があったので、人々は（僧正のことを）「榎の木の僧正」と言っていた。（僧正は）「この名は、ふさわしくない」と言って、その木をお切りになってしまった。（すると）その切り株が残っていたので、（人々は）「きりくひの僧正」と言った。（僧正は）ますます腹を立てて、切り株を掘り捨ててしまったところ、その跡が大きな堀であった（＝大きな堀になっていた）ので、（人々は）「堀池の僧正」と言った。